コロシコロサレコロスカヒ

立花　潮美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コロシコロサレコロスカヒ

【Ｎコード】
Ｎ１２８２ＢＡ

【作者名】
立花　潮美

【あらすじ】
殺したい、と願う少女。
殺されたい、と願う少年。
そんなふたりの出会いは、必然だったのかもしれない。陰と陽、白と黒。ふたりはおたがいに正反対であったがゆえに、その心をすこしずつ重ねていく。
ところが、そんなふたりの周囲で事件が起こりはじめる。その余波が、すこしずつふたりの周囲にも押し寄せてきて……。
高校生の少女と少年が織りなす、シンプルなショートストーリー。

プロローグ

わたしはひとを殺したいの。

〈　どうしても？

ええ、そう。どうしてもよ。この手で、この体で、確実に殺さないといけないの。

〈　どうして？　何のために殺すの？

自分を生かすために、殺したいの。

〈　ああ、それは良い理由だね。

ありがとう。

〈　他のやりかたでは、うまくいかない？

だめだわ。無理ね。

〈他の手段を、確かめてみた？

ええ、それはもう、ひと通りね。

〈　本当に？

わたしだって、バカじゃないつもりよ。色々と探してみたし、試してもみたわ。

＞　たとえば、どんな？　教えてもらっても、いいのかな。
話してあげても良いけど、なぜ聞きたいの？
＞　ぼくにとって、それはとても大事なことだから。物事の過程は重視されるべきだ。
なんで？　そんなに過程が大切かしら？　結論よりも？
＞　だって、死という結論は同じでも、殺されかたの過程は数多くあるよね？
ああ、わかったわ。あなたは、どう殺されるか、を気にしているのね。
＞うん、その通り。わかってもらえて嬉しいよ。
なあるほど、それならＯＫよ。教えてあげても良いわ。でも、ここじゃイヤ。
＞ううんと、他の人に知られてしまうのが、いやなのかな。
わたしは心の秘密を、これから死ぬ人以外に見せるつもりはないの。
＞　了解した。じゃあ、捨てアドを教えるから、それにメールをもらえるかな？
良いけど、この掲示板にアドレスを公開するわけでしょ？

知らないひとが、いたずらでメールを送ってきたらどうするの？
わたしだって、わかるかしら？

＞わかるよ。だって、ぼくは殺されたいのだから。

ああ、素敵なお答えね。わたし、ドキドキしてきちゃった。

第一章　ころしたいの――――（１）

すでに、残されている時間は少ない。頃志摩潰煉（ころしま かれん）は、そう確信していた。

今こうして、黒板の文字をノートに黙々と書き写している間にも、『それ』はガン細胞のように彼女の身体を蝕みつつある。

これは、失われていく感覚だろうか？

それとも、壊されていく感覚だろうか？

いや、違う。本当に怖いのは、そんな感覚ではない。もっとも忌むべきことは、気づかないこと。知らないうちに、こっそりと置き換えられていること。

毎朝、鏡を見ている自分には、少しずつ起こっている変化はわからない。

『しばらく見ない間に、潰煉ちゃんはすっかり大人になったね』

久しぶりに会う親戚から、そんな言葉をかけられたとき、潰煉はすさまじいまでの戦慄を覚える。自覚がないまま『大人』という別の生き物に、潰煉はなりつつある。気がつかない間に、いちばん大切なものが汚されつつある。

すぐに止めなくてはいけない。一分一秒を争う事態になるかもしれないのだ。だからこそ、殺さなくてはいけない。たしかに、その行為は許されないのだろう。

「別に、構わないけど」

潰煉は、あっさりと口にした。

その様子を見た友人の已足内心（いたりだい こころ）が、ショートカットの髪をわずかに揺らしながら、潰煉よりも頭ひとつぶん高い長身をかがめたまま、いそいそといった感じで自分の椅子ごと近づくと、胸に抱え込んでいたお弁当箱を、潰煉の机の上に置く。

潰煉は、かるく首をかしげてから訊いた。「心、どうしたの？お昼休みに、お弁当を一緒に食べるのは、いつものことじゃない。

わざわざ訊かなくても良いのに」
「それはココロのセリフだよぉ」心が、上目遣いで潰煉の顔をそっと見つめた。「だって、カレンちゃん、今日ちょっと変じゃなぁい？」
潰煉も、鞄から自分のお弁当箱を取り出す。「そう？　別に何もないけど」
「なら、いいけどぉ……。あ、そうそう、今日の放課後ね、つきあってくれない？　あのね、駅の向こうに、新しい小物のお店ができたみたいなの。だからね、ココロは行ってみたいな。かぁいいの、いっぱぁいあるみたいだよ」
潰煉は、ご飯を飲み込んでから言った。「今日はダメかな」
「えー、どうしてぇ？」心が、たこさんウインナーをもぐもぐしながら訊く。
無表情で潰煉は答える。「どうしても、よ」
「あ、カレンちゃん、やっぱり変なのぉ」心はまだもぐもぐしている。
「そんなに変かしら？　そういう風に言われると、あんまりうれしくない」
「え、でもぉ、なんかウキウキしてるように見えるの。なにかいいことあったぁ？」
気づかれないように、よどみなく箸を動かしてから、潰煉は嘘をついた。「何も」
心は何か言いたそうな顔をしていたが、二個目のたこさんウインナーに箸を伸ばすと、体を丸めて再び上目遣いに潰煉を見ている。心は、潰煉よりも縦に長い体型をしているので、その体勢が潰煉にはひどく窮屈に見えた。
短めの髪といい、スレンダーな体型といい、外見はボーイッシュな感じなのに、心の挙動や言動はひどく女の子っぽい。腕にはめている時計も女児向けのキャラクターもので、どう考えても似合わないのに、心は外そうとしない。口では祖母の形見だから、などと言

っているが、あやしいものだ、と潰煉は思っていた。
「どうしても、今日はダメぇ？」心が、捨てられた子犬のような目で友人を見つめる。
視線を、窓から見える空の方にそらして、潰煉は答えた。「どうしてもよ。ひとりじゃダメ？　ひとりで行くと、何かまずいの？」
「ほら、だってブッソウだしぃ」心が目をうるうるさせている。
潰煉は目を細めた。「ブッソウ？　物騒なの？　そういう場所にあるお店なの？」
「うーん、そうじゃなくて。ほら、サツジンハンが居るからぁ」
殺人犯、という言葉に、はじめて潰煉が箸を止めた。「なんで、急にそんなことを？」
「だって、例の連続殺人事件が起こってるの、陰惨市内だよ？　近くだよ？　ココロ、ひとりは怖いなぁ」心がおびえる子犬のような顔をしている。
たしかに陰惨市内では、心の言う通り、いささか奇妙な連続殺人事件が発生していた。
殺人は市内の各所で行われ、そして死体がそのまま遺棄されている。
どうやら殺害方法はすべて同じらしいのだが、被害者に共通項がないので、通り魔的な犯行ではないか、と新聞やニュースでは報道されている。加えて死体の損傷が激しいこともあり、猟奇的な要素もあるのではないか、とも噂されている。
潰煉の記憶が間違いでなければ、一週間ほど前にも、とある公園に死体がひとつ転がっていたはずで、新聞やテレビは大騒ぎになったものだった。
だが、心はちょっと大袈裟ではないか、と潰煉は感じていた。
「近く、っていうけどさ。事件が起こってるのは、陰惨市の、けっこう広い範囲でしょ？　事件の現場になってる場所は、この高校がある堕胎町からは、ずいぶん離れてたはずだわ」
「あ、意外なの。カレンちゃん、ずいぶんと詳しいんだね」

余計なことを言ってしまった、と潰煉は内心で舌打ちをした。殺人事件に興味を持っていることを、友人の心には知られたくなかったからだ。

「ごめん、でもやっぱり、今日はひとりで行ってね」

すこし強引に、話を戻す。大切な約束があることを悟られないよう、潰煉は最大限に表情をコントロールした。

心は子供っぽいくせに、妙なところで勘の良さを見せることがある。時々、根拠もないのに的を射た指摘をしたり、潰煉の頭の内側を容赦なく覗き込んだりしてくる。そういうことには慣れていたはずだが、今日はその状況は避けたかった。

潰煉はしばらくの間、黙々とお弁当を食べ続けた。

「ぷうぅ」心が、顔の下半分を思い切りふくらませて抗議した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1282ba/

コロシコロサレコロスカヒ

2012年1月4日03時52分発行